

ニガウリの省力短期間多収栽培法の露地および無加温抑制栽培における適応性

無加温半促成ニガウリを対象に開発した省力短期間多収栽培法は露地および無加温抑制栽培に適応可能で、露地栽培では7月上旬から8月末までの2か月間で5.8～6.0t/10a、無加温抑制栽培では8月中旬から11月中旬までの3か月間で5.7～6.0t/10aの可販果収量が得られる。

農業研究センターい業研究所作付体系研究室（担当者：岩本英伸）

研究のねらい

ニガウリは周年的に需要がある果菜であるが、本県では半促成および早熟栽培が中心で他の時期の経済栽培は少ない。そこで、春メロンの代替品目としてニガウリを導入するために開発された省力短期間多収栽培法（農業の新しい技術 No. 634、平成 22 年 5 月）の露地および無加温抑制栽培への適応性を明らかにし、栽培時期の拡大を図る。

研究の成果

1. 平坦地域における 4 月 13 日播種、5 月 10 日定植の露地栽培では、省力短期間多収栽培法に準じた栽培により、7 月 2 日から 8 月 30 日までのおよそ 2 か月間に 5.8～6.0t/10a の可販果収量が得られる（図 1）。
2. 平坦地域における 6 月 14 日播種、7 月 6 日定植の無加温抑制栽培では、省力短期間多収栽培法に準じた栽培により、8 月 18 日から 11 月 19 日までのおよそ 3 か月間に 5.7～6.0t/10a の可販果収量が得られる（図 2、写真 1）。

普及上の留意点

1. 露地栽培では交配開始後 20～25 日間程度は雄花の開花数が少ないため、人工交配で確実に着果させる。その際には、訪花昆虫が花粉を摂食・採取する前の早朝に交配する必要がある。その後は訪花昆虫による自然交配とするが、着果後小果や不良果を摘果する必要がある。無加温抑制栽培では全期間人工交配とし、充実した雌花を選んで交配する。両栽培とも交配初期は雌花の開花数が多いため、着果過多による草勢低下を招かないように着果数を制限する。
2. ネットへの誘引までに新葉や茎の先端がマルチに触れると高温により枯死するため、マルチ上に敷きわら等を行う必要がある。

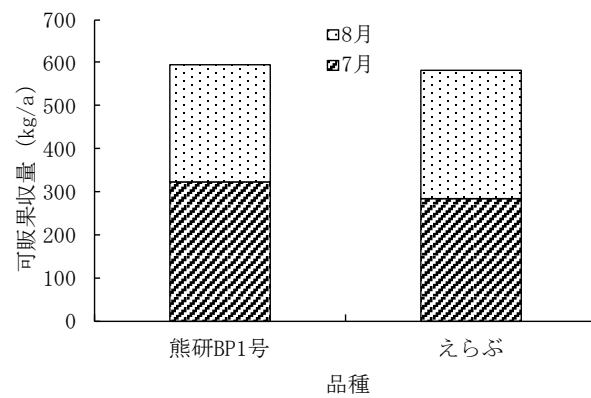


図 1 露地栽培における収量
 2010年4月13日播種、5月10日定植、7月2日～8月30日収穫
 栽植密度55.6株/a (畝幅1.5 m、株間1.2 m)
 施肥量N:P₂O₅:K₂O=3.0:3.0:3.0 kg/a (全量基肥)

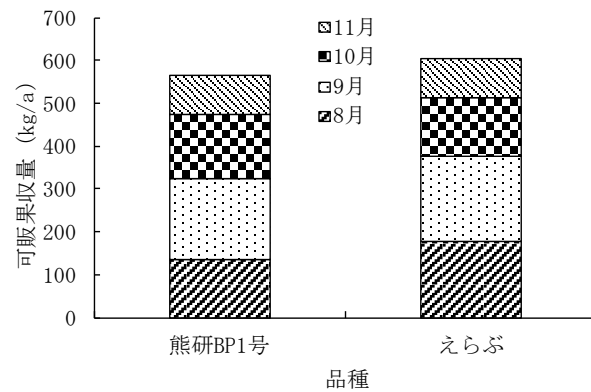


図 2 無加温抑制裁培における収量
 2010年6月14日播種、7月6日定植、8月18日～11月19日収穫
 ガラス温室で栽培し、最低気温が20℃を下回る頃から保温した
 栽植密度55.6株/a (畝幅1.5 m、株間1.2 m)
 施肥量N:P₂O₅:K₂O=3.0:3.0:3.0 kg/a (全量基肥)



写真 1 無加温抑制裁培の状況